

信太山丘陵の経緯

泉北地域の須恵器の窯跡の状況から、7世紀頃の信太山丘陵には松林があったのではないかと考えられる。

江戸時代、信太山丘陵一帯は、聖神社境内地として管理されていた。(天保3年(1832年)泉州泉郡信太郷立会絵図から松林があったと推測される。)

明治になって政府に上知され、明治3年に堺県の管轄下の国有地となる。堺県のもと小野氏による新田開発「小野新田」が信太山丘陵の130町におよんだ。明治18年の陸測図にも、山ノ谷集落の西隣に家々が描かれ「小野新田」と記されている。小野新田では、主として養蚕(ようさん)が行われていたが、水不足や台風被害も重なり、明治10年代末ころまでに、経営は放棄された。

明治5年までには、大砲射的場が設置され、その後、陸軍信太山演習場となり、第4師団諸部隊の演習等がおこなわれ、小野新田の多くも演習場に取り込まれていったと思われる。

大正8年には、信太山演習場に隣接する伯太村黒烏に野砲兵第4聯隊が移転し、信太山一体は軍事拠点のひとつとして位置づけられ、満州事変にはじまる15年戦争の時代には、徐々に演習場が拡張されていった。

大阪層群としての信太山

「信太山の丘陵の土質は、赤いどろんこの土で、しかも強酸性であり、松とか、モウセンゴケなどの食虫植物のように、酸性土壌にも耐えられる植物しか自生しなかった。しかし、この赤土が古代社会の須恵器の材料となるとともに、散在する溜池の堤防用土として威力を発揮した。この土は農耕にはやや不適で演習場となった」(*1)と考えられる。

信太山丘陵の利用状況

信太山丘陵には沢山の松が存在していたが、戦争中は軍によって、戦後は燃料用や松枯れ病によって大幅に減少した。付近の住民は、信太山の下草や落葉・松露(しょうろ)などをとりにいていた。演習場内には、少なくない農地や溜池が展開するとともに、地域の生活に欠かせない薪や下草を採取する場であった。

また、和泉地方は、明治から戦後の今日にいたるまで、和泉木綿織物の特産地であり、晒木綿の乾燥場として、信太山丘陵の草原で天日乾燥されていた。

信太山の松の歴史

今までに5回の危機にみまわれたといわれている。第1回は、古代社会において須恵器を焼くための燃料として伐採。第2回は、軍の演習地となり、満州の大平原での戦争訓練のために伐採。第3回は、戦後の燃料不足時代に伐採。第4回は、松くい虫の被害。第5回は、自衛隊が作戦訓練のために伏屋に近い箇所を伐採。

信太山丘陵は、戦前は陸軍、戦後は米軍自衛隊の演習場として使用されてきた。そのため、地域の住民生活との関係にも変化が生まれ、演習等によって地形や植生も変わってしまったところも少なくない。しかし、演習場であったために、大規模な宅地開発の波を免れ、今日では貴重な自然が残ることになったともいえる。

【出典・引用元】

(*1) 南 清彦編「ふるさとの思い出写真集 明治大正昭和 和泉」昭和56年11月20日 国書刊行会 p.5

【参考文献・資料】

大阪府教育委員会「陶邑 」1978

大阪市立大学日本史研究室 和泉市教育委員会「2011年度和泉市合同調査」

大阪市立大学日本史学会「市大日本史第15号」2012.5

和泉市「和泉市50年のあゆみ」2006.9

南 清彦編「ふるさとの思い出写真集 明治大正昭和 和泉」昭和56年11月20日
国書刊行会

和泉市立伯太小学校PTA刊「私たちの郷土 伯太・池上」1980.3